

ご意見ご連絡は下記へどうぞ

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭 e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

事務局長 Peter Nichols ピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

北海道熊研究会 Hokkaido Bear Research Association

Website は「北海道野生動物研究所」と入力して下さい

「北海道熊研究会報」読者の皆様へお知らせ

2014年8月18日から連日13回にわたり、北海道新聞の夕刊紙面の、「私のなかの歴史」で、「ヒグマ研究45年」と言う題で、私(門崎允昭)が、私の「ヒグマについての考え、人と熊の共存策」等を口述、編集委員の「中尾 吉清」さんが取材文章化し、掲載されました。その第4回目、8月21日(金曜日)掲載をここに再録しますので、ぜひ、お読み下さい。

2014年(平成26年)8月21

私のなかの
歴史

1970年、私は開館1年前の北海道開拓記念館(札幌)の研究員になりました。初代館長は恩師、犬飼哲夫先生です。

最初に取り組んだテーマは「北海道の自然と開拓の関係」。明治期からの開拓が、自然に与えた影響、それによって人と野生動物にどんなことが生じたか調査・研究し、公表するのです。

開拓使の事業報告などの公文書や古い新聞に目を通し、人的、経済的な被害をリストアップするこ

動物学者

かどさき
門崎

まさあき
允昭さん

ヒグマ研究45年

④

とから始まりました。
開拓とは、言い換えると、クマの生息地を取り上げることです。



母の元を離れた1歳5カ月の若クマ。子が1頭だと早く自立する

開拓記念館

生態調査に明け暮れる

クマの反撃ともいえる事故も多発しました。例えば1978年(明治11年)1月、札幌で猟師に追われたヒグマが反撃、さらに丘陵地区の開拓農家に侵入。3人が死亡、2人が重傷を負っています。

開拓使は、入植者に銃を持たせるべきだった。銃が無理なら、やりを支給してほしかった。アイヌ民族はオプクワという1・8センチほどのやりを所持していました。

粗末な開拓小屋の窓から侵入して人を襲ったケースは多い。板に五寸くぎを打ち、裏返して軒下に

置くだけで防げたでしょう。

ヒグマのことを何も知らない人々を呼び寄せ、開拓に従事せしめた。今もそうですが、行政はクマ対策に無知です。

1967年まで農地・放牧場の造成が続き、家畜の被害も74年まで多発しました。クマの生息地を農牧地にした場合、そこを利用していった個体から子、孫の3世代にわたって、その場所に出没するということが分かっています。

一方、人の生活圏で最後の人身事故は64年、日高管内平取町で小学生の女の子が市街地から3キロ離れた地点で襲われ亡くなりました。これ以降の事故はクマの生息

地、出没地で起きています。ですから、人の対応次第で事故を減らすことは可能なのです。

私の業務はもう一つ、ヒグマの生態を調べることでした。胆振管内厚真町奥地の道有林が、札幌に近い割に多くのクマが生息し、冬ごもりの穴もあって絶好の観察地でした。

クマが好んで通る沢沿いを二人でたどり、周囲360度を見回して足跡やふん、木に登った跡、アリの食べるために地面を掘り返した跡などを観察します。

当時、全道的にシカが少なかった。草むらに幅30センチくらいの動物が歩いた気配があれば、それはヒ

グマが通った道。クモの巣が張ってあるかどうかで、いつごろ通ったかも分かります。

7月、木の上の山ブドウは熟していないのに、クマのふんに山ブドウの種と皮がいっぱい入っていました。「どこかに熟した実があるのか？」と不思議でした。

ササ原を歩いていて、山ブドウのつるに足を取られ、答えが分かりました。木がないササ原で地べたをほう山ブドウの実は、木の上より気温が高いせいか熟していました。ヒグマは、こうした場所の山ブドウを食べていたのです。

71年から11年間、毎年50日以上、現地に足を運びました。ここで、ヒグマの生態について多くを学ぶことができました。

(聞き手・中尾吉清)

日 22 月 01 年 10

(Tel. 011-892-1057)

@pop21.odn.ne.jp

大 小 二

Research Association

りる不

球1、の面
の球、地
吉、鼠中
(日脚金)

の
こ
し
新
報